

談話室

第6回表面定量分析に関する
国際会議

吉原 一 紘

金属材料技術研究所
〒305 つくば市千現 1-2-1

(1990年12月25日 受理)

Quantitative Surface Analysis-6

Kazuhiro YOSHIHARA

National Research Institute for Metals
1-2-1, Sengen, Tsukuba-shi 305

(Received December 25, 1990)

第6回表面定量分析に関する国際会議は11月13日より11月16日までの4日間、英国ロンドン市で開催された。会場である Royal National Hotel は英国の誇る大英博物館のすぐそばにあり、location としてはたいへん良いところである。この会議は、これまで5回とも英国の National Physical Laboratory (NPL) が主催しており、今回も会場の設定から会議の進行に関して全てを運営している。この会議は比較的小さな会議で、23ヶ国から約180人程度参加した。招待講演は12件、口頭発表は29件、ポスターは68件であった。今回の講演の内容をおおよそ分類してみた結果を表に示す。この分類表を見て気がつくことは application に関する発表が最も多いにもかかわらず、それに対応する招待講演がないことである。これは主催者の意図と参加者の実際のニーズが少し離れていたのではないかと考えられる。

表面定量分析に関しては、VAMAS プロジェクトを中心としてわが国でも積極的に対応しており、日本からは VAMAS プロジェクトの日本委員会のメンバーである阪大志水先生および吉川氏、名工大後藤先生、アルバ

ックファイ田中氏、日本鋳業田沼氏、金材技研吉原および吉武の7名が参加した。また、金材技研から現在 NPL の M. P. Seah 氏(この会議の議長)の所に留学中の土佐君が会議の運営の手伝いをしていたし、住友金属から英国 Surrey 大に留学中の吉川氏も参加していた。会議は single session で行われ、会場もこじんまりとしており、また互いに顔見知りの人が多く、at home な雰囲気の中で進行した。表面定量分析に関してはスペクトルをいかに正しく解釈するかということに着目した発表が多く、AES と XPS という手法の違いは重要ではなくなってきたという印象がもたれた。また VAMAS-SCA-JAPAN 委員会では、異なった分析装置から得られたスペクトルデータでも共通のソフトウェアの中でデータ処理をすることができるというシステム (common data processing system) を開発しており、これについて口頭発表とパソコンを持ち込んでのデモを行ったところ、たいへん好評であった。

昼食および夕食は原則として会場のホテルで参加者が一同に会して同一のものをとることになっていたが、さすがに評判通り英国の食事はすばらしい味で、英国紳士の忍耐強さは、ここから生まれるのだなと想像させられた。コーヒーに関しては名工大後藤先生の言によれば、“このコーヒーは一度、微びさせてからいれているのでしょう”ということであった。

この会議は小規模で、気楽に参加できるという雰囲気がある。立派なプロシーディングスはないが、簡単な予稿集は発行されているので、会議の内容についてもう少し詳しく知りたいという方は私までご連絡ください。

次回は1992年の9月または11月ごろにケンブリッジまたはオックスフォードで行われるとのことであった。議長の Seah 博士は日本でのアナウンスは日本表面科学会に頼もうかなと言っておられたので、近々アナウンスが表面科学誌に載せられると思います。次回参加したい方は会誌に注意しててください。

QSA-6 の発表内容の分類

	Metrology				Computation	Application	Total
	Electron spectroscopy	SIMS & SNMS	Depth & Sputter	Others			
Invited	2	4	4	0	2	0	12
Oral	10	1	3	3	2	10	29
Poster	14	11	7	5	4	27	68
Total	26	16	14	8	8	37	109
	64						